（公財）福島県文化振興財団設立50周年記念事業
読み直すふくしまの歴史講演会

令和2年11月29日

# ふくしまの弥生時代の石器

## ー特に浜通り地方を焦点としてー

遺跡調査部　吉田　秀享

# 目　次

- 最初の遺跡調査
- ショッキングだった研究報告
- 東北地方南部での弥生時代石器の不思議
- Ⅱ様式期の石器（いわき市龍門寺遺跡・相馬市柴迫A遺跡）
- なぜⅡ様式期に大陸系磨製石器が確認できるのか？
- その後の石器（Ⅳ様式期の石器）
- おわりに　その1　石包丁製作の道具
- おわりに　その2　鉄器化の波とふくしまの特徴

弥生時代の時期区分（開始年代の概念）

| 西暦 | 本編の年代観（九州大学の見解） | | 国立歴史民俗博物館の見解 | | 中国 |
|---|---|---|---|---|---|
| | | | 縄文時代 | 後期 | |
| | 縄文時代 | 後期 | | 晩期 | 殷 1072 |
| 1000 | | | 弥生時代 | 早期 | 西周 770 |
| | | 晩期 | | 前期 | 春秋 403 |
| 500 | 弥生時代 | 早期 | | | 戦国 221 |
| | | 前期（Ⅰ様式） | | 中期 | 202 前漢 8 |
| 紀元前 紀元後 | | 中期（Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ様式） | | | 25 後漢 |
| | | 後期（Ⅴ様式） | | 後期 | 222 三国 |
| 300 | | | | | |

2017『原町市史』第1巻通史編Ⅰ「原始・古代・中世・近世」より転載

# 最初の遺跡調査

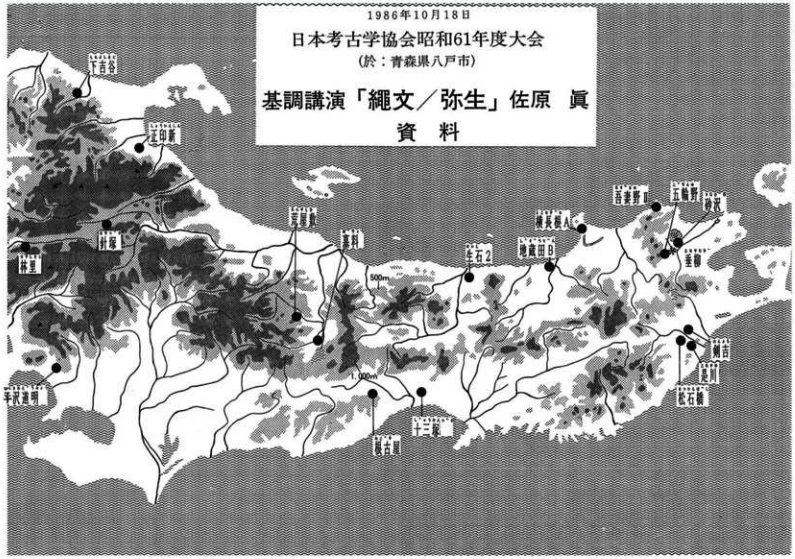
昭和59年（1984年）10月
新地町武井A遺跡

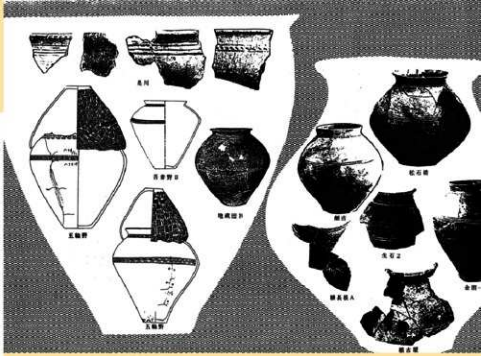
弥生時代中期後半桜井式期の集落跡。硬質砂岩製石包丁と、石英粗面岩（流紋岩）製のアメリカ式石鏃出土。

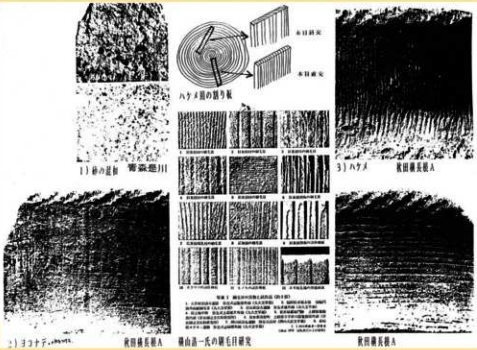
新地町武井Ａ遺跡（上・左下）と武井地区出土弥生時代石器(右下)

1983『相馬開発関連遺跡調査報告Ⅰ』　福島県文化財調査報告書第215集より転載

# ショッキングだった研究報告（その１）



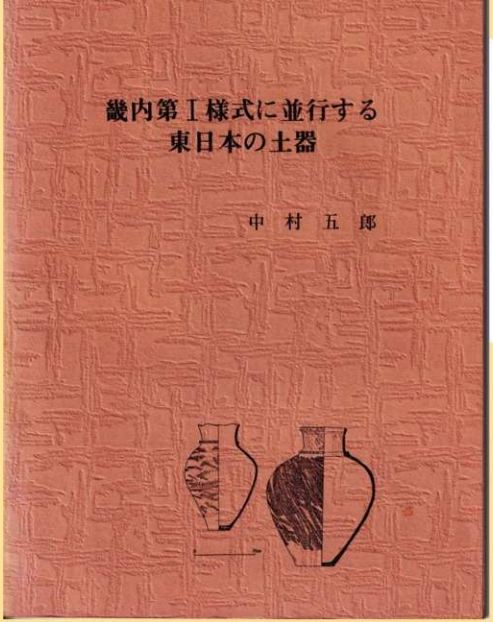



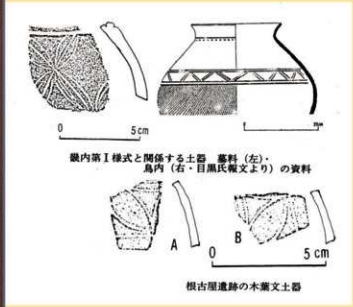


# 遠賀川系土器の既報告

昭和57(1982)年　刊行の
私家本

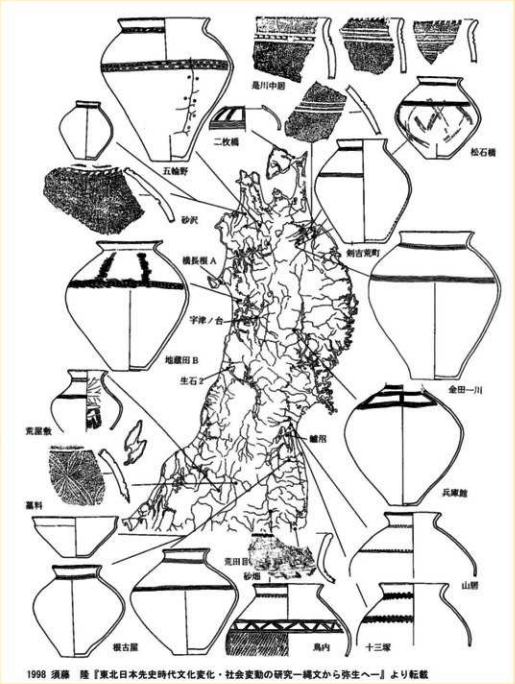
佐原氏発表の4年前に、すでに福島県内出土の最古の弥生土器が畿内第Ⅰ様式中段階後半に並行することを明確に示した論文。



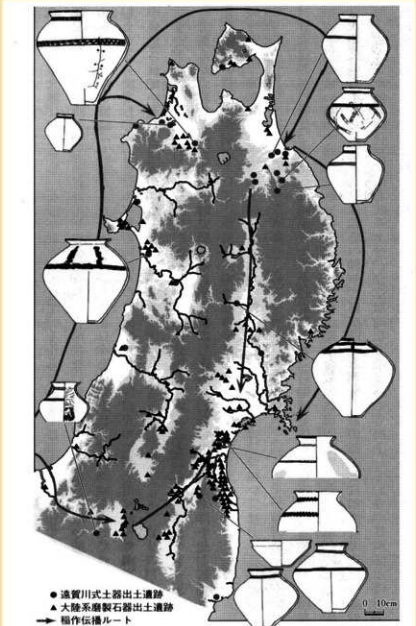



# 遠賀川系土器の
# その後の研究

平成10(1998)年時点の
東北地方での遠賀川系
土器の出土遺跡(左)
と、その伝播ルート
を類推した図(右)




1998 須藤　隆『東北日本先史時代文化変化・社会変動の研究―縄文から弥生へ―』より転載



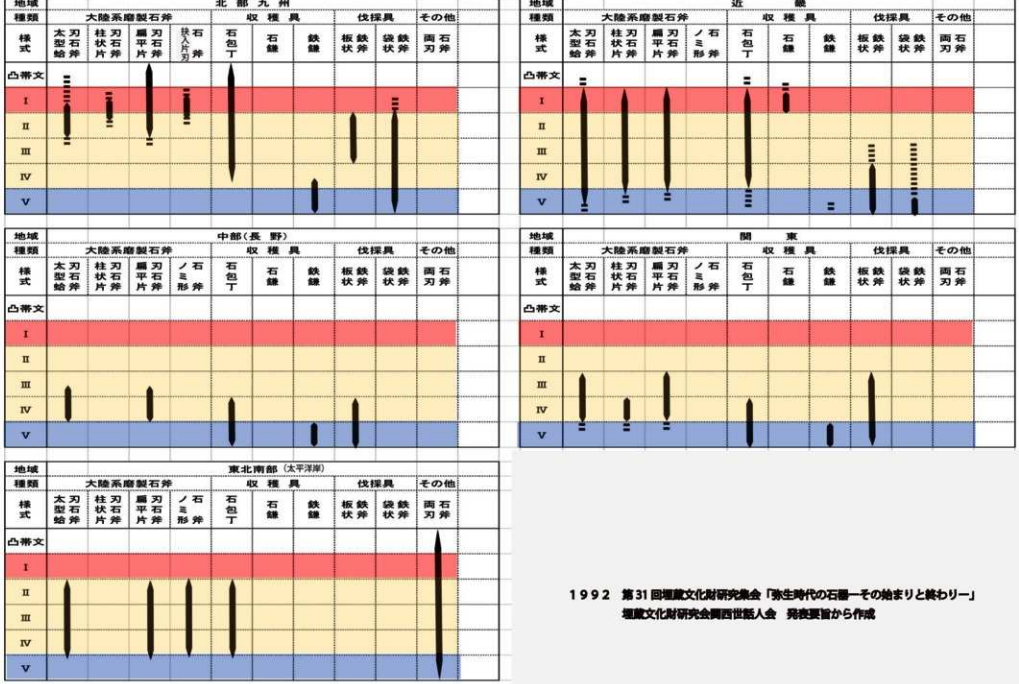

東北への弥生文化の流入

2020 近江俊秀「海から読み解く日本古代史
太平洋の海上交通」より転載

# ショッキングだった研究報告（その2）

平成4（1992）年に開催された　通称“九阪”（九州と畿内の研究者を主とする研究集会）での、大陸系磨製石器等の確認時期を示した図

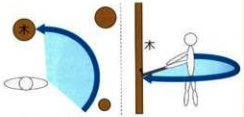
## 弥生時代石器類消長表




1992　第31回埋蔵文化財研究集会「弥生時代の石器―その始まりと終わり―」
埋蔵文化財研究会関西世話人会　発表要旨から作成

# 縄文時代の石斧（左）と弥生時代の石斧（右）

4 縦斧（たておの）（竪斧型石斧）復元品
原品：縄文時代前期
木の又を利用した柄（握柄）に、石斧の刃を縦方向に装着する。石斧は、ソケット状に加工された柄に切り込まれ、紐で固定される。長76cm・幅55cm。




5 縦斧による伐採
立木の密度が低い森では、横方向に振る縦斧による伐採が効率的である。縦斧を使用すると横方向に切り込むことができるため、横斧と比較して使い切りはと、少ない作業量で伐採することができるからである。

6 縦斧（たておの）（竪斧型石斧）復元品
原品：縄文時代中期
木の又を利用した柄（握柄）に、石斧の刃を縦方向に装着する。石斧は、柄の先端に平行な平面を設けて紐で固定される。長75cm・幅31cm。

7 縦斧の装着法
①は古式弥生期、②・③は初期弥生期の装着法。柄をソケット状にして石斧を山の高さ山高弥生期は、装着部分が薄かやすく縦矢性が高かった。一方、強矢性を用いて石斧を紐で縛って固定する初期弥生期は、装着部が幅れにくく縦矢性が向上したようである。

8 太形蛤刃石斧
出雲市矢野遺跡／弥生時代
①長16.5cm・幅6.5cm、②長17.4cm・幅5.4cm。

9 太形蛤刃石斧復元品
原品：弥生時代
立木の伐採用に用いられたもの。柄に孔を空けて装着する。

10 柱状片刃石斧
松江市西川津遺跡／弥生時代
①長15.5cm・幅3cm、②長13cm・幅3.5cm。

11 柱状片刃石斧復元品
原品：弥生時代
木材の表面を平らにする際、粗く仕上げるのに使われたもの。上面の溝に紐を架けて縛り柄に固定した。

12 扁平片刃石斧
出雲市矢野遺跡／弥生時代
①長10.5cm・幅1cm、②長8.9cm・幅2.6cm＋、③長6.7cm・幅2.5cm。

13 扁平片刃石斧復元品
原品：弥生時代
木材の表面の仕上げや、細かな成形などに使われたもの。刃幅に違いがあり、作業に応じた使い分けが考えられる。

2013『匠の技　弥生木製品から出雲大社まで』島根県古代出雲歴史博物館より転載

# 現在東北地方で確認されている籾痕等と水田跡

表 2-3　仙台平野中部・いわき地域・弘前平野南部の弥生水田

| | 仙台平野中部：名取川下流域 | いわき地域：夏井川下流沖積平野 | 弘前平野東部：浅瀬石川流域 |
|---|---|---|---|
| I 期 | | | |
| II 期 | 富沢：13b 層水田跡（IIB 類）<br>富沢：99 次 14 層水田跡（IIB 類） | 戸田条里：XIII 層水田跡（III 類） | |
| III 期 | 富沢：15 次 11a 層水田跡（IIB 類）<br>郡山：65 次 9 層水田跡（IIB 類）<br>長町駅東：IV 区 Va 層水田跡（IIB 類）<br>高田 B：7 層水田跡（IIIB 類）<br>香形：6a1 層水田跡（IIB 類） | | 垂柳：VIa 層水田跡（IIB 類）<br>高畑(3)：VIa 層水田跡（IIB 類）<br>前川：C1-VII 層水田跡（IIB 類） |
| IV 期 | 富沢：15 次 9a 層水田跡（IIB 類） | 番匠地：VIII 層水田跡（IIIB 類）<br>中山館：I 区 12 層水田跡（IIIB 類） | |
| V 期 | 富沢：24 次 X 層水田跡（IIB 類）<br>山口：10 次 8 層水田跡（IIB 類）<br>後河原：1 次 VIIa 層水田跡（IA 類） | | |

※水田跡の構造は、開田地の設定方法である成立基盤と水田区画の方法である水田形態の各属性の相関から類型化されており、成立基盤は I 類：緩傾斜面（勾配 1% 前後以上）、II 類：ほぼ平坦な地形面（勾配 1% 前後以下）、III 類：旧河道や谷状の地形面、水田形態は、A：水田区画が地形面の勾配に合わせて行なわれているもの、B：水田区画の主たる要因が地形面の勾配とは異なり小区画を指向するものに分けられる。

※仙台平野中部では、富沢遺跡で II 期以前の 15 次 13b 層水田跡を最古として、V 期まで 8 時期以上の水田跡が検出されている。また、北目城跡で III～V 期の水田跡、元袋遺跡で弥生時代の水田跡が検出されている。

※他の地域では、北部南半域弘前平野北部で砂沢遺跡 8 層水田跡（I 期：IA 類）、南部北東域相双地域北部で岩下 A 遺跡 IV 層水田跡（II 期：IA 類）、南部南西域台畑遺跡 VII 層水田跡（III 期：IIB 類）がある。

2015 斎野裕彦「農耕社会の変容」『倭国の形成と東北』より転載

表 1-2　レプリカ法による調査成果一覧【高瀬(2012b)より】

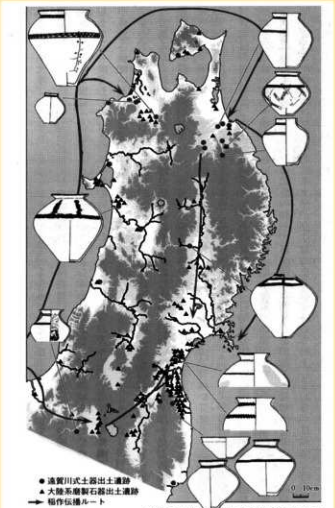
| 都道府県 | 遺跡 | 時期 | 検討対象土器数 | レプリカの電子顕微鏡観察を実施した圧痕数 | 圧痕の由来物質 |
|---|---|---|---|---|---|
| 北海道 | 札幌市 N30 | 縄文晩期後葉 | 111 個体 | 2 | 不明 2 |
| | 札幌市 H37（丘珠空港地点） | 続縄文前期（静沢式並行） | 71 個体 | 8 | 穀類 1<br>不明 7 |
| | 札幌市 H317 | 続縄文前期（二枚舌古段階並行） | 36 個体 | 3 | 不明 3 |
| | 札幌市 H37（柴町地点） | 続縄文前期（二枚舌新段階並行） | 2 個体 | 0 | — |
| 青森県 | 三沢市猫又(2) | 縄文中期末～後期初頭 | 1(破片数、整理中発見の圧痕のため実際の母数はさらに多い) | 1 | 不明 1 |
| | 三沢市模井沿(3) | 縄文後期後葉 | 3(破片数、整理中発見の圧痕のため実際の母数はさらに多い) | 3 | 不明 3 |
| | 三沢市天狗森貝塚 | 弥生前期後葉 | 1(破片数、整理中発見の圧痕のため実際の母数はさらに多い) | 1 | イネ 1 |
| | 田舎館村垂柳 | 弥生中期中葉 | 8 個体(整理中に圧痕が発見されたもののみ対象としているため、実際の母数はさらに多い) | 27 | イネ 11<br>不明 16 |
| 岩手県 | 奥州市鬼 II | 弥生中期 | 1 個体(整理中に圧痕が発見されたもののみ対象としているため、実際の母数はさらに多い) | 1 | イネ 1 |
| | 滝沢村湯舟沢 | 弥生中期～後期 | 6 個体(整理中に圧痕が発見されたもののみ対象としているため、実際の母数はさらに多い) | 9 | 不明 9 |
| 秋田県 | 秋田市地蔵田 | 弥生前期後葉 | 2(破片数、整理中発見の圧痕のため実際の母数はさらに多い) | 2 | イネ 1<br>不明 1 |
| | 男鹿市横長根 A | 弥生中期前葉 | 7 個体(整理中に圧痕が発見されたもののみ対象としているため、実際の母数はさらに多い) | 8 | イネ 4<br>不明 4 |
| | 男鹿市三十刈 I | 弥生中期後葉 | 1 個体(整理中に圧痕が発見されたもののみ対象としているため、実際の母数はさらに多い) | 6 | イネ 4<br>不明 2 |
| | 三種町家の上 | 弥生中期中～後葉 | 2 個体(整理中に圧痕が発見されたもののみ対象としているため、実際の母数はさらに多い) | 4 | イネ 2<br>不明 2 |
| 宮城県 | 栗原市山王囲 | 縄文晩期後葉～弥生中期 | 39340(破片数、一部サンプル抽出による推定数) | 14 | 不明 14 |
| | 名取市表館 | 弥生中期後葉 | | 1 | イネ 1 |
| | 岩沼市砂の内 | 弥生中期 | | 1 | イネ 1 |
| 山形県 | 山形市北柳 1 | 縄文晩期後葉 | 334(破片数) | 3 | 不明 3 |
| | 酒田市生石 2 | 弥生前期後葉 | 39 個体(整理中に圧痕が発見されたもののみ対象としているため、実際の母数はさらに多い) | 25 | イネ 14<br>不明 11 |
| 福島県 | 会津若松市南御山 | 弥生中期中葉 | 1 個体(整理中に圧痕が発見されたもののみ対象としているため、実際の母数はさらに多い) | 1 | イネ 1 |

2015 高瀬克範「稲作農耕の受容と農耕文化の形成」

『倭国の形成と東北』より転載

# 東北地方南部での弥生時代石器の不思議

西からの伝播
①遠賀川系土器…弥生時代の幕開け。種籾を入れた？
②弥生時代にみられる石器…いわゆる大陸系磨製石器

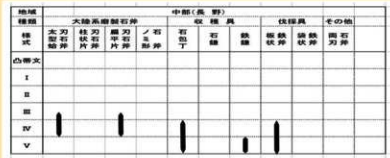



東北への弥生文化の流入

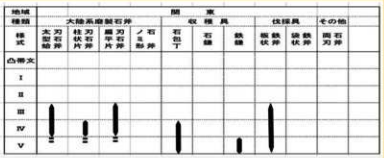
2020 近江俊秀「海から読み解く日本古代史 太平洋の海上交通」より転載

遠賀川系土器が確認できる遺跡と、大陸系磨製石器、特に石包丁が確認できる遺跡の分布ギャップ

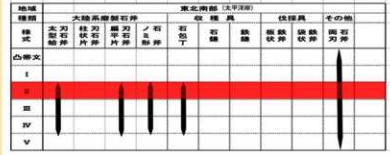
大陸系磨製石器等が中部・関東地方より先に東北地方南部の太平洋岸で確認できる不思議



| 地域 | 中部（長野） | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 種類 | 大陸系磨製石斧 | | | | | | | 収穫具 | | 伏採具 | | | その他 | |
| 様式 | 太型石鋤斧 | 刃状石片斧 | 柱状石片斧 | 扁平刃石片斧 | 刃部ノミ形斧 | 石包丁 | 石鎌 | 鉄鎌 | 板状斧 | 袋状斧 | 鉄斧 | 両刃石斧 | |
| 凸帯文 | | | | | | | | | | | | | |
| I | | | | | | | | | | | | | |
| II | | | | | | | | | | | | | |
| III | | | | | | | | | | | | | |
| IV | | | | | | | | | | | | | |
| V | | | | | | | | | | | | | |



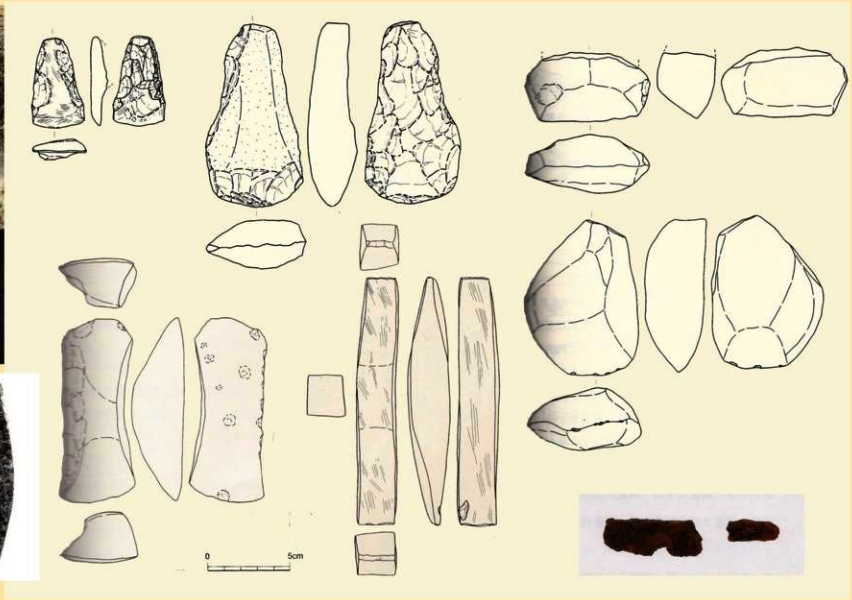
| 地域 | 関東 | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 種類 | 大陸系磨製石斧 | | | | | | | 収穫具 | | 伏採具 | | | その他 | |
| 様式 | 太型石鋤斧 | 刃状石片斧 | 柱状石片斧 | 扁平刃石片斧 | 刃部ノミ形斧 | 石包丁 | 石鎌 | 鉄鎌 | 板状斧 | 袋状斧 | 鉄斧 | 両刃石斧 | |
| 凸帯文 | | | | | | | | | | | | | |
| I | | | | | | | | | | | | | |
| II | | | | | | | | | | | | | |
| III | | | | | | | | | | | | | |
| IV | | | | | | | | | | | | | |
| V | | | | | | | | | | | | | |



| 地域 | 東北南部（太平洋岸） | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 種類 | 大陸系磨製石斧 | | | | | | | 収穫具 | | 伏採具 | | | その他 | |
| 様式 | 太型石鋤斧 | 刃状石片斧 | 柱状石片斧 | 扁平刃石片斧 | 刃部ノミ形斧 | 石包丁 | 石鎌 | 鉄鎌 | 板状斧 | 袋状斧 | 鉄斧 | 両刃石斧 | |
| 凸帯文 | | | | | | | | | | | | | |
| I | | | | | | | | | | | | | |
| II | | | | | | | | | | | | | |
| III | | | | | | | | | | | | | |
| IV | | | | | | | | | | | | | |
| V | | | | | | | | | | | | | |

1992 第31回埋蔵文化財研究集会「弥生時代の石器―その始まりと終わりー」
埋蔵文化財研究会関西世話人会 発表要旨から作成

# Ⅰ様式期の石器（須賀川市松ケ作A遺跡）




2001 「県道古殿須賀川線（うつくしま未来博関連）遺跡発掘調査報告」福島県文化財調査報告第384集より転載・加筆

# II様式期の石器（いわき市龍門寺遺跡）

1985 「龍門寺遺跡」いわき市埋蔵文化財調査報告第11冊より転載・加筆

# Ⅱ様式期の石器（相馬市柴迫A遺跡）

柴迫Ａ遺跡・柴迫古墳群近景

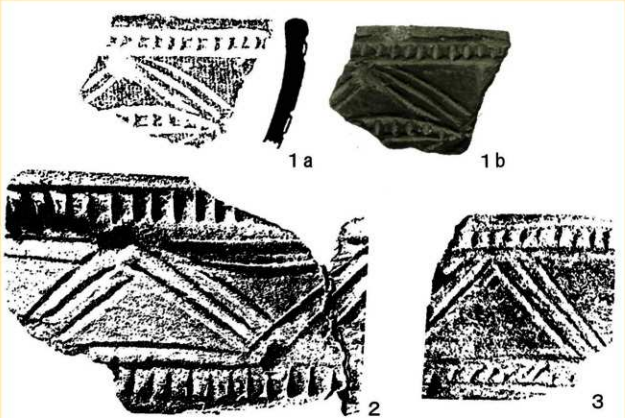
2002　「一般国道６号バイパス遺跡発掘調査報告」Ⅳ　福島県文化財調査報告第403集より転載・加筆

柴迫Ａ遺跡１号溝跡７層出土遺物　2002　「一般国道６号バイパス遺跡発掘調査報告」Ⅳ　福島県文化財調査報告第403集より転載・加筆

1　石鏃　2　石槍　5　石包丁６～８直縁刃石器
9～13　両刃石斧14・15　磨石　16　ハンマー？

# なぜII様式期に大陸系磨製石器が確認できるのか？

推測その1（縄文時代晩期の橿原式土器）

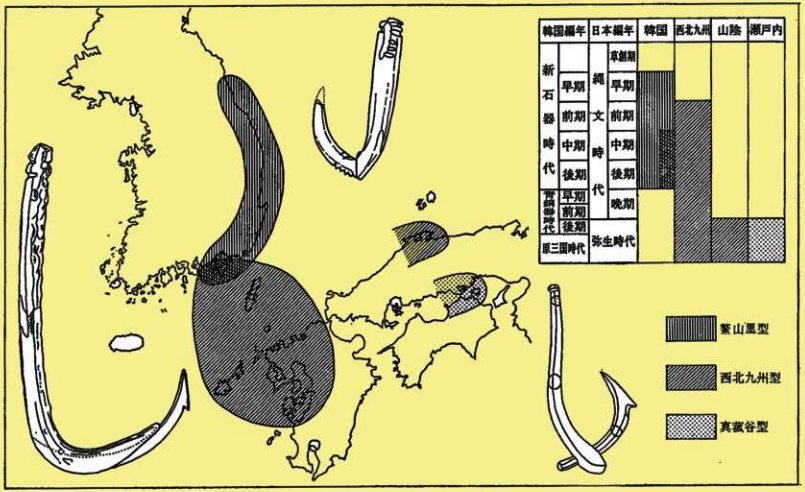



1いわき市薄磯貝塚　2・3奈良県橿原遺跡

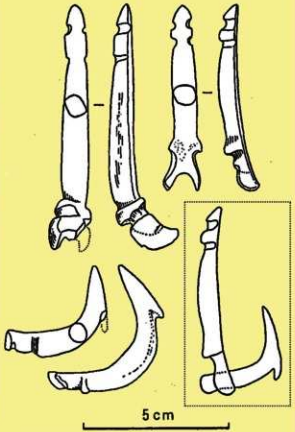
1979『考古』20号　福島県立磐城高等学校史学部より転載・加筆

1979『考古』20号　福島県立磐城高等学校史学部より転載・加筆

# なぜⅡ様式期に大陸系磨製石器が確認できるのか？　推測その２（結合釣針）




日本と韓国の結合釣針の分布と編年



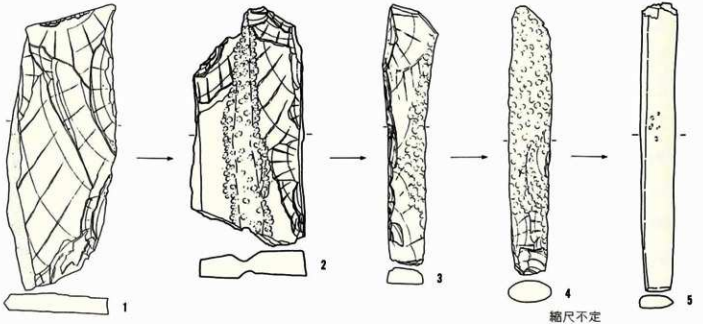

いわき市寺脇貝塚出土結合釣針と
着想想定図（右下）

1985 渡邊誠「西北九州の縄文時代漁撈文化」『列島の文化史』２より転載・加筆

# なぜII様式期に大陸系磨製石器が確認できるのか？

推測その３
（縄文時代晩期の石器製作と石材）

村 1980「真野ダム関連遺跡発掘調査報告XI」より転載




石刀・石棒製作模式図　１・５ 岩下Ａ遺跡 ２ 羽白Ｃ遺跡 ３・４ 稲荷塚Ｂ遺跡

1988「真野ダム関連遺跡発掘調査報告XI」福島県文化財調査報告書第193集より転載・加筆

相馬古生層の位置と石材調査地点（久保a 1989・柳沢a 1996 より作成）

a－真野ダム関連遺跡群　b－天神沢遺跡　c－南入Ａ遺跡　d－桜井遺跡

1：元川（宮城県山元町）、2：滝川（新地町）、3：砂子田川（相馬市）、4：立田川（相馬市）、5：宇田川（相馬市）、6・7 真野川（鹿島町）、8：木能川（鹿島町）、9：瀬ノ沢川（鹿島町）、10～12：上真野川（鹿島町）、13・14：新田川（原町市）、15 水無川（原町市）、16：太田川（原町市）

2003「福島県相双地域の弥生時代遺跡」福島県立博物館学術調査報告書第39集より転載・加筆

# Ⅱ様式前半で成立する大陸系磨製石器存在への回答

西からの複数要素の伝播…縄文時代晩期前半

＋

大陸系磨製石器の石材と
縄文時代晩期石器の石材　の“一致”

＋

豊富な資源の粘板岩

↓

**Ⅱ様式前半での大陸系磨製石器成立の背景**

豊富な石材資源獲得の容易さと、縄文時代晩期から
続く粘板岩での石器製作技術、弥生時代になっても
同様石材で製作できる石器

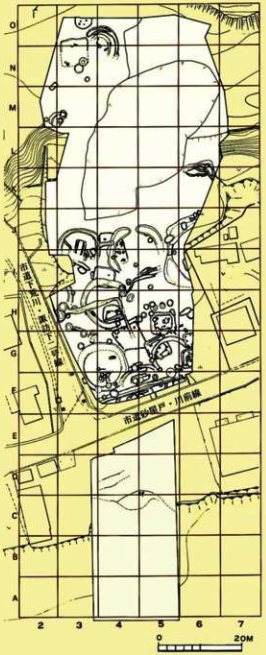
相馬古生層の位置と石材調査地点（久保1989・柳沢1996より作成）

a－真野ダム関連遺跡群　b－天神沢遺跡　c－南入A遺跡　d－桜井遺跡

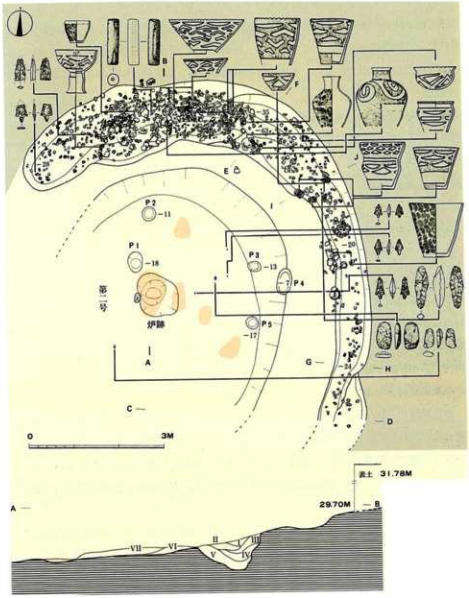
1：元川（宮城県山元町）、2：滝川（新地町）、3：砂子田川（相馬市）、4：立田川（相馬市）、5：宇田川（相馬市）、6・7 真野川（飯島町）、8：木舟川（飯島町）、9：瀬ノ沢川（飯島町）、10～12：上真野川（飯島町）、13・14：新田川（原町市）、15 水無川（原町市）、16：太田川（原町市）

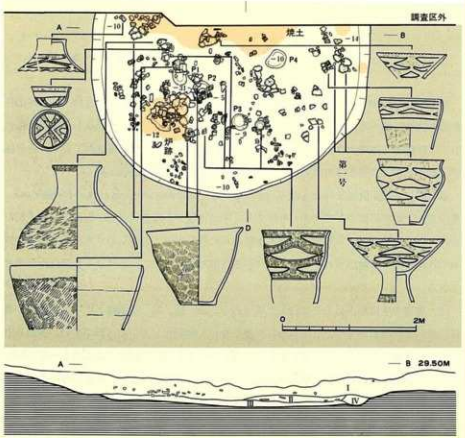
2003　「福島県相双地域の弥生時代遺跡」福島県立博物館学術調査報告書第39集より転載・加筆

# 弥生時代の両刃石斧製作（いわき市龍門寺遺跡）




龍門寺遺跡グリッド配置図

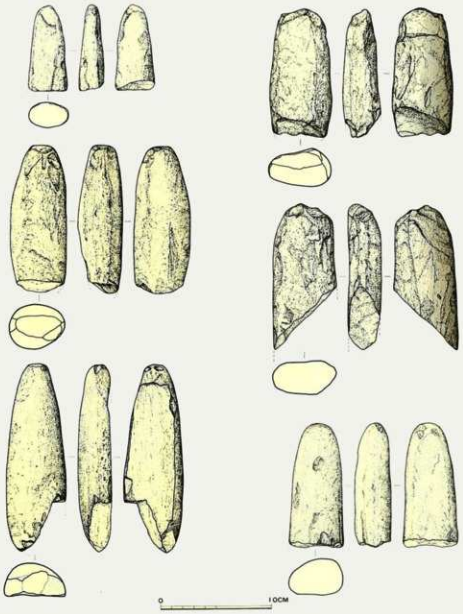



1985 「龍門寺遺跡」いわき市埋蔵文化財調査報告第11冊より転載

龍門寺遺跡の弥生時代住居跡

# 弥生時代両刃石斧の製作
（いわき市龍門寺遺跡）




閃緑岩製磨製石斧

閃緑岩製磨製石斧未製品・剥片

1985「龍門寺遺跡」いわき市埋蔵文化財調査報告第11冊より転載

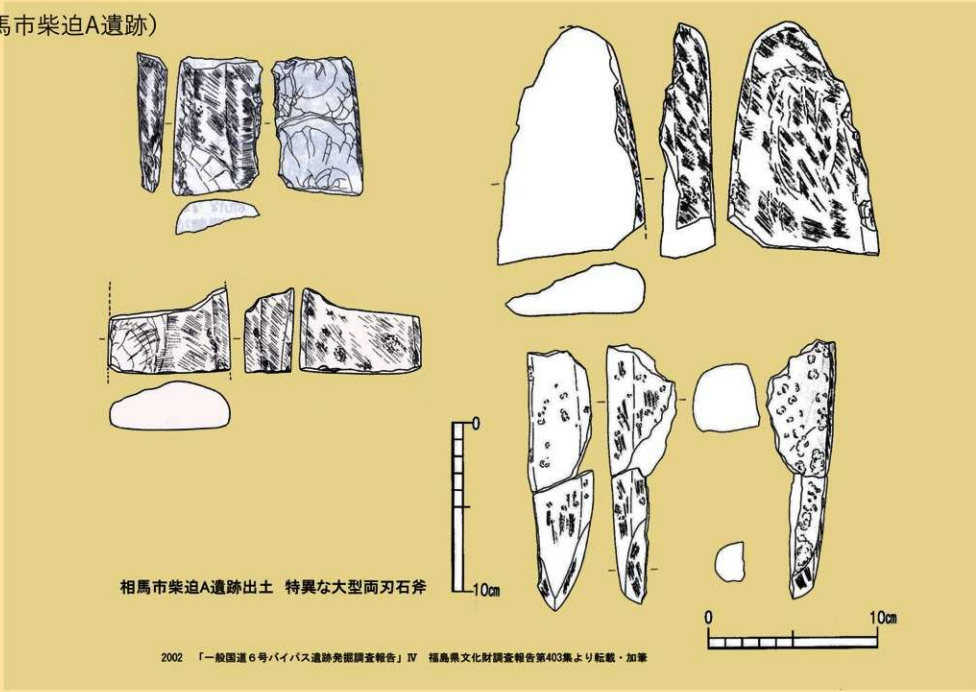
弥生時代流紋岩の石核と剥片
（いわき市龍門寺遺跡）

流紋岩石核

流紋岩剥片

1985　「龍門寺遺跡」いわき市埋蔵文化財調査報告第11冊より転載

# 弥生時代の両刃石斧（相馬市柴迫A遺跡）




相馬市柴迫A遺跡出土　特異な大型両刃石斧

2002　「一般国道６号バイパス遺跡発掘調査報告」Ⅳ　福島県文化財調査報告第403集より転載・加筆

# その後の石器（Ⅳ様式期の石器）

南相馬市金澤地区の位置図

1994「原町火力発電所関連遺跡調査報告」Ⅳ　福島県文化財調査報告書第297集より転載・加筆

金沢地区全景（原町火力発電所本体部）

1994「原町火力発電所関連遺跡調査報告Ⅳ」福島県文化財調査報告書第297集より転載・加筆

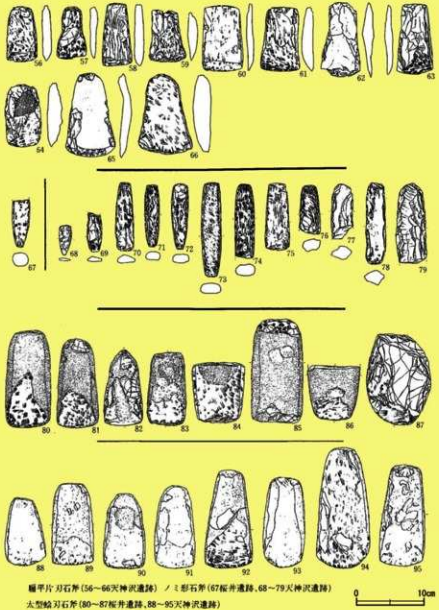
南相馬市南入Ａ遺跡

1993　福島県県立博物館「企画展　東北からの弥生文化」図録より転載・加筆

# その後の石器
# （Ⅳ様式期の石器）

南相馬市
　天神沢遺跡
　桜井遺跡

石鏃下（1～8.桜井遺跡.9～28天神沢遺跡）、磨平片刃石斧（29～42桜井遺跡.43～55天神沢遺跡）




磨平片刃石斧（56～66天神沢遺跡）　ノミ形石斧（67桜井遺跡.68～79天神沢遺跡）
太型蛤刃石斧（80～87桜井遺跡.88～95天神沢遺跡）

桜井遺跡・天神沢遺跡の石器

1991　藤原紀敏・田中　敏「福島県浜通り地域における弥生時代石器生産の一様相
ー（1）鹿島町天神沢遺跡と原町市桜井遺跡採集石器群の比較ー」『福島県立博物館紀要』第5号より転載・加筆

# その後の石器（Ⅳ様式期の石器）

白岩堀ノ内遺跡と周辺遺跡位置図

1997 「常磐自動車道遺跡調査報告」10 福島県文化財調査報告書第332集より転載・加筆

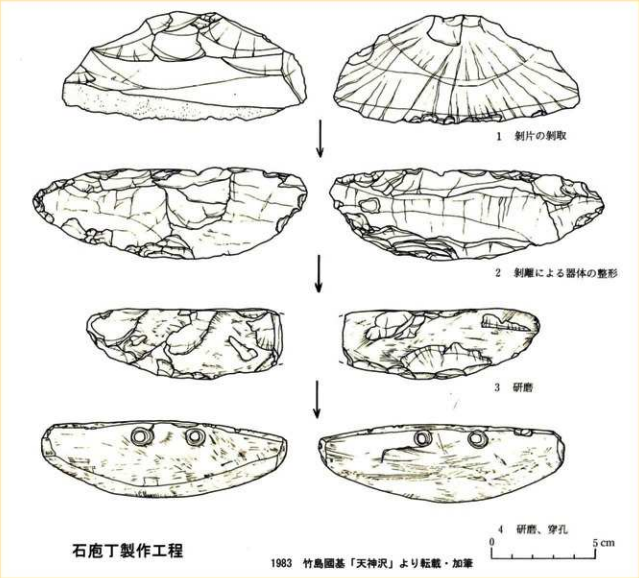
白岩堀ノ内遺跡全景

1997 「常磐自動車道遺跡調査報告」10 福島県文化財調査報告書第332集より転載・加筆

白岩堀ノ内遺跡弥生石器

1997 「常磐自動車道遺跡調査報告」10 福島県文化財調査報告書第332集より転載・加筆

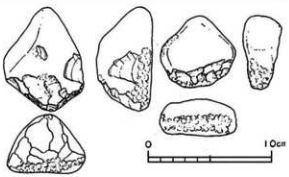
# おわりに　その1　石包丁製作の道具



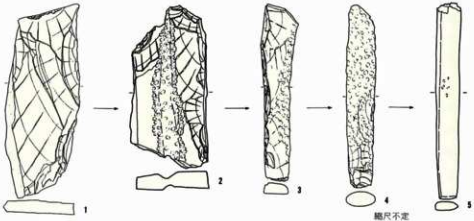

1983　竹島國基「天神沢」より転載・加筆

1993　福島県県立博物館「企画展　東北からの弥生文化」図録より転載・加筆

# その1　石包丁製作の道具

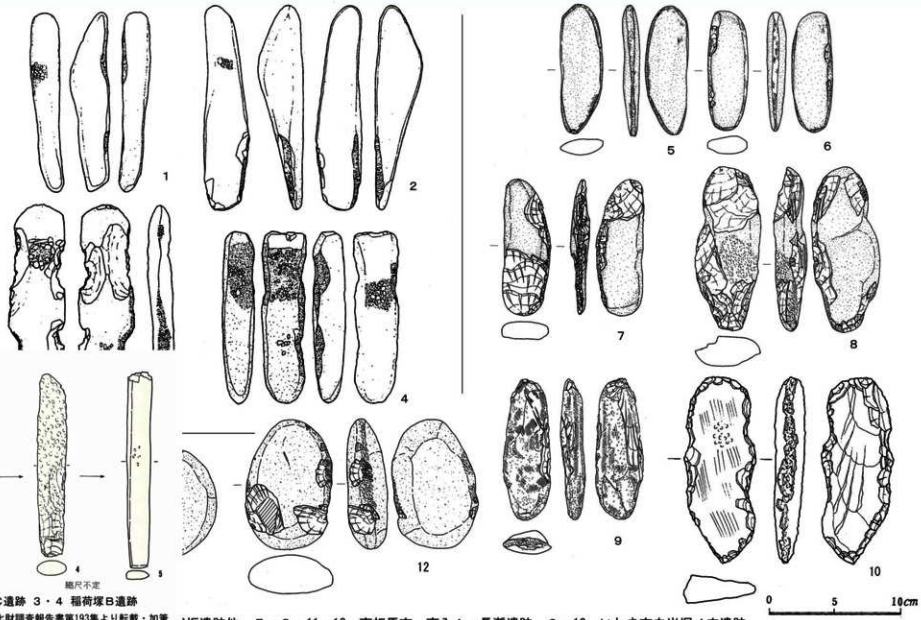



1988「真野ダム関連遺跡発掘調査報告XI」
福島県文化財調査報告書第193集より転載・加筆




石刀・石棒製作模式図　1・5 岩下A遺跡　2 羽白C遺跡　3・4 稲荷塚B遺跡

1988「真野ダム関連遺跡発掘調査報告XI」福島県文化財調査報告書第193集より転載・加筆




坂遺跡他　5～8・11・12　南相馬市　南入A・長瀞遺跡　9・10　いわき市白岩堀ノ内遺跡

1980　上村佳典「石鹿丁製作における工具について一屏賀坂型敲打器について一」地域相研究第９号・

1994「原町火力発電所関連遺跡調査報告」Ⅳ福島県文化財調査報告書第297集・1997「常磐自動車道遺跡調査報告」10福島県文化財調査報告書第332集より転載・加筆

# おわりに　その2　鉄器化の波とふくしまの特徴

弥生時代の鉄器

1991「弥生文化一日本文化の源流をさぐる一」大阪府立弥生博物館より転載・加筆

関東地方以西では、弥生時代中期中頃（Ⅲ様式期）からは、新しい道具として鉄器が使用されるようになる。
しかし、「ふくしま」では一度成立した石製道具を維持していく。
周囲は次の新しい道具＝鉄器を使用していくものの、
ふくしまは旧態依然のものを固持していく。
　ここにふくしま弥生人の特徴が見いだせるのではないか。

2020(平成20)年11月3日(火)毎日新聞記事より転載

# 弥生期 最大の鉄矛

## 鳥取・中尾遺跡の住居跡

鳥取県倉吉市教委は1日、市内の中尾遺跡で、弥生時代中期の竪穴住居跡から弥生時代では国内最大となる全長54・3㌢の鉄矛が出土したと発表した。朝鮮半島で作られて持ち込まれたとみられる。板状と鋳造の鉄もそこからは見つかった。これ3種の鉄器が同じ場所から完全な形で見つかるのは国内初。祭祀に使われた可能性があり、祭祀の形態や鉄器の流通ルート解明のための貴重な資料となる。

工業団地の発掘調査が始まった。住居跡は約2～100年8月に発掘調査を始



発掘された鉄矛。弥生時代では国内最大の全長54.3㌢＝野原寛史撮影




## 54.3㌢ 鉄器の流通手がかり

年前のものとみられ、標高約250メートル後にある。鉄矛とて、朝鮮半島からの船状鉄斧（全長27・5㌢）が住居内の地面に突き立てられ、住居ごと燃やされた形跡がかった。当時は国内に製鉄技術はない。貴重な鉄器が住居から回収されていないことから、市教委は「家を廃絶する儀礼なら、何らかの祭祀に使われたのではないか」とみる。鉄器を住居ごと燃やす祭祀の例はこれまで確認されていない。

柳刀の儀礼とされる鉄矛は希少で、九州北部では有力者の墓から副葬品として十数例が確認されているが、住居跡から見つかるのは極めて珍しいという。

県中部に位置する中尾遺跡からは北東約20㌔にある鳥取市の沿岸部には、朝鮮半島や大陸との交流拠点だった青谷上寺遺跡があり、今回見さったものと同じ小型の鉄矛が出土。中尾遺跡は、この遺跡と瀬戸内側を結ぶ中継地点として鉄器がもたらされたとも考えられるという。

村上恭通・愛媛大教授（考古学）は「住居に火を放つ際、貴重品をさらけてでも実現したい願いがあったのではないか。弥生時代に行われた新しい形の祭祀を考えさせられる発見だ」と話した。

現地説明会は14日午前10時から計4回あり、定員は各20人。事前申し込みが必要で、問い合わせは倉吉市教委文化財課（0858・22・4419）。【野原寛史、花塚隆人】